

## To Sea of Silence water

はらはらとした歩み、海へと続く小径<sup>こみち</sup>

僕であるところの この隣人

君が言い出した

「曇りであれば、小径自身が海へ顔を向ける」と

祈りの風がスカートの裾を引く・・・

白いウェディングドレスの裾を捧げ持つ、ひと組の童子のように

砂浜はまだ見えない

けれど海原は望める

小径の両側を縁どる叢<sup>くさむら</sup>が知っているとは思えない

理知という無用の創造物を生み出した人間の神など

遠く、そして、広い

抱くことも、抱かれることもできないほど

白く、ほの暗い雲の模様が君を先導する

生の遙か彼方に感じられるという、Sea of Silence water へ

無であるように見えるものを並べてみるという

それを繰り返してきた僕を、君は連れて行くという

ひかり  
陽光は、なぜこの丘に棲むことが適わぬのか

君の抱く、最愛の生である陽光は、なぜ近付かぬのか

止めることができるはず

僕の背に広がる、被造物の世界に戻ることもできるはず

が、

しかし

僕の侵した人間の世界、毒づいた世界

そこで犯した罪とは単なる冒瀆でも侮辱でもない

君は微笑するのか

ああ、その、時間を揺らし、大気を薄め、僕を魅惑する君の微笑こそ、海には似つか  
わしくない

なのに、知っているというのか・・・

彼方にたなびく雲の、遙か向こうにあるという、Sea of Silence water を

差し出された掌の、ほのかな温かさ

そこに沈む無邪気な企みを、この小径は容認する

私達の行動の、衝動の、その意味するところ

いや、その事実そのものさえ 沈む叢

小径を歩む、僕たちにも

いずれ砂浜が見えるにちがいない

終わらせることのできぬ「To」

その始まりとなる砂浜が

(2004.1.4)